



Takayuki
SUZUKI

Portland Timbers



Takuro
NISHIMURA

Portland Timbers



Takashi
HIRANO

Vancouver Whitecaps

取材・文：写真●宇都宮徹吉
Text & photos by Tetsuji UTSUNOMIYA



Shintaro
HARADA

Crystal Palace Baltimore

海外を目指す日本人選手の新たな移籍先として脚光を浴びつつある「USL」の可能性を探る

欧洲至上主義だった日本人選手の海外移籍。しかし、最近はこの傾向に変化が生じている。「サッカー後進国」と言われたのも、今は昔。アメリカを目指すジャパンーズは、今後も増え続けるだろう。それだけの魅力が、かの地にある。

アメリカという選択肢

5人の日本人選手が活躍
注目を集めれるUSL

先月25日、アメリカから嬉しい

ニュースが届いた。独立リーグUSL（ユナイテッドサッカーリーグ）1部のチャールストン・バッテリーに入団した吉武剛が、移籍後初ゴールを決めたのである。吉武は、この試合と次の試合で連続してMVPに選出された。初めての海外デビューとしては、これ以上にない上々の滑り出しと言えよう。

日本人選手の海外移籍は、かつては限られた選手（現役の日本代表など）が、限られた国々（イタリア、ドイツ、フランスなど）を目指すのが当然、という空気が支配的だった。だが、今は違う。代表とは縁がないかった選手、さらにはプロの経験のなかった選手であっても果敢に海外へ挑戦するようになつたし、その行

先も東欧や北欧、さらにはアジアや

北米などにも広がりを見せてる。

ここで、にわかに脚光を浴びつ

あるのが北米だ。現地のトップリー

グであるMLS（メジャーリーグ

サッカー）でプレーする日本人選手

は木村光佑（コロド・ラピッズ）

のみだが、JSLでは5人の日本人

選手が活躍しており、今後その数は

さらに増えると見られる。だが、J

SLの位置づけが特殊なこともあります

（後述）、日本ではなかなか彼らの情

報が伝わらないのが実情。そこで本

稿では「日本人選手の新たな活躍の

場」としてのJSLについて、選手

たちの証言をもとに紹介したい。

J2クラブをしのぐ? 米独立リーグ・JSL

「立派な練習場やクラブハウス。 むしろ日本よりも恵まれている」

「ここまで4試合で1ゴール、1アシストと、なかなかいいスタートが切れました。こっちの新聞に、自分

優勝している名門で、一番入りたかったチームでした。実力的にも、MLSのチームには負けないと想

ます。日本だと、J1とJ2のレベルの違いはあるけど、MLSとJ

SLはそこまでではない。単純に、

「少なくとも今のチームに関して
は、J2のクラブよりも環境は整っ
てていると思います。スタジアムも専
用だし、立派な練習場やクラブハウ
ス、チーム所有のババまであります。
それから、クラブが借りてくれてい
るアパートにも、ブルルやジムが
あって自主トレには最適です。保険
やレンタカーの手配なんかも、相談
すれば何でも対応してくれますよ」

具体的な年俸は聞けなかつたが、
日本でプレーしていた時代と比べる
と、はるかに低いようだ。だが、そ
れ以外の環境面では「むしろ日本よ
りも恵まれている」という。シーズ
ンは始まつたばかり。それでも当人
のブログを見ると、新たな活躍の場
とチームの信頼を得て、表情が輝い
て見えるのが、実に印象的である。

の写真が一面トップになつたと聞い
た時は、嬉しかったですね」

そう語る吉武は現在27歳。今才

フ、東京Vから戦力外通告を受ける

と、それまで温めていた海外移籍を

決意する。アメリカ行きは、かねて

からの希望だったそうだ。

「理由ですか？まず英語圏に絞っ

ていたこと。それと、ベッカムが（L

Aギャラクシー）に来たこともあつ

て、これから絶対MLSは大きくな

るという確信もありました。まずは

そこで自分のポジションを獲得し

て、それから違う国に行けばいい。

チャールストンは去年のオープン

カップ（日本の天皇杯に相当）で準

優勝している名門で、一番入りた

かったチームでした。実力的にも、

MLSのチームには負けないと想

ります。日本だと、J1とJ2のレベ

ルの違いつてあるけど、MLSとJ

SLはそこまでではない。単純に、

「少なくとも今のチームに関して
は、J2のクラブよりも環境は整っ
てていると思います。スタジアムも専
用だし、立派な練習場やクラブハウ
ス、チーム所有のババまであります。
それから、クラブが借りてくれてい
るアパートにも、ブルルやジムが
あって自主トレには最適です。保険
やレンタカーの手配なんかも、相談
すれば何でも対応してくれますよ」

具体的な年俸は聞けなかつたが、
日本でプレーしていた時代と比べる
と、はるかに低いようだ。だが、そ
れ以外の環境面では「むしろ日本よ
りも恵まれている」という。シーズ
ンは始まつたばかり。それでも当人
のブログを見ると、新たな活躍の場
とチームの信頼を得て、表情が輝い
て見えるのが、実に印象的である。

お金があるかないかの違いですね」

新天地で10番付けた吉武は、右

のMFでプレー。セットプレーの

キッカーとしての役割も担う。

「日本は技術が高い選手が多いです

が、こちらでは身体能力が高い選手

が多くて、パワフルで迫力のある

サッカーが主流。そんな選手を生か

してゴールに結び付けて行くのが、

監督に求められている自分の役割で

す。こっちは「ディフェンスラインが

深くて、中盤でのプレッシャーが日

本よりないので、ボールをもらつた

時に前を向ける場面が多く作れる。

その意味でも、自分のストロングボ

イントを発揮しやすいですね」

「サッカーにも表われる人間の生命力。 それがアメリカで最も痛感したこと」

アメリカで試される 適応力と解決能力

もちろん海外でのプレーは、それ
なりの苦労も伴う。今度は先輩格の
選手の言葉に、耳を傾けてみたい。

原田慎太郎はJSL2部のクリスタ
ルパレス・ボルチモアに所属。日本
では、横浜、大宮、徳島、アローズ
北陸でプレー。その後、渡米してボ
ルチモアに迎えられ、今季で3シ
ーズン目を迎える。これまで海外経験
といえば「遠征で韓国に行つただけ」
という原田だが、今では英語のスキ
ルもかなり上達した様子だ。

「契約が決まって、こっちに着いた
アパートだけ与えてもらつて
『じゃあ、練習で』という感じ。あ
とは、銀行の口座開設とか、携帯の
契約とか、すべて自分で、それも英
語で解決しなければならなかつたで

田」らしい。

ピッチ上での原田は、守備から前



原田慎太郎

（クリスタルパレス・ボルチモア/MF）

80年11月8日生まれ、埼玉県出身。横浜や大宮、徳島、アローズ北陸などでプレー。J1通算16試合1得点、J2通算4試合0得点。攻守に優れるMF。

線への「コネクター」に徹していく。
基本はセントラルMFだが、チーム
事情により、当初はCBでもプレー
していた。

「チームができたばかりで、『ディフェンスライン』が機能していなかつたんです。それで監督から『CBをやつてくれ』と。僕自身、それまで公式戦でのDFの経験はなかつたんですけど、ラインコントロールもしつかりできたし、1対1も問題なかつたですね。あと、日本では『一回奪つたボールは失うな』という教育を受けてきたので、そういうプレースタイルは、逆にこっちでは新鮮だつたみたいです」

——〇でバンクーバーの勝利。試合後、2年前に大宮でチームメイトだった平野と西村は、お互いの健闘を称え合つて、がちり握手した。
もつとも、U.S.Lでの「日本人対決」は、今後は珍しいものではなくなるだろう。来季はさらに、日本人選手が増えると思われるからだ。筆者がそう考える理由は、左の4点。
①テクニックに優れ、勤勉な日本人選手の評価が高まっていること
②公用語が英語であること

がらリーグにおけるブラジル人選手のような評価を受けている。しかも、メンタリティは勤勉で献身的、引く手あまたなのも頷ける。

②については、選手に学習意欲さえあれば、環境に順応する期間は他の国に比べて比較的早いと言える。

③については「割り切り」が条件となる。U.S.とのトライアウトは12月下旬から始まり、年を越して2月下旬でピークを迎える。3月中旬には終わる。そのため、ギリギリまで日本

早さが奏功したケースと言える。
④については、アメリカでは年齢で選手を判断する習慣が日本と比べて希薄であることを指摘しておきたいい。クラブ側が「勝利に貢献できる選手」と判断すれば、ペテランだろうが若手だろうが関係なく獲得に走る。実際、バンクーバーの平野は昨シーズンは30試合中22試合に出場し、しかも34歳にして「チーム内新人賞」まで獲得している。当人も「こつちに来て、自分の年齢を意識

めには、まずJSLで実績を作りMLSクラブからキャンプ参加のナフアーレを受け、さらに厳しいキャンプでの見極めを経て、初めてトップリーグでプレーできるのである。

今のところ、JSLからMLSに「ひとり昇格」した日本人は皆無とはいえる。可能性がゼロというわけではないので、実現すれば快挙だついでに言えば、日本からよりもアメリカからのはうが、地理的にヨーロッパは近い。アクセスとスマ

方には、うれしいお祝いの言葉を贈る

隆行と西村卓朗がスタメン出場。S-Lでプレーする5人の日本人選手のうち、実に3人が同じピッチで顔を合わせることになった。結果は1

省略の「行け行けサッカー」が主流
だったU.S.において、中盤でタメを作ったり、絶妙なスルーパスを併給したりできる日本人選手は、さながら

られる、すぐに国内移籍に見切つけてアメリカに渡り、3月上旬にチャールトンとの契約を果たした。実力もさることながら、決断の

まMLSに昇格できるわけではない（日本のプロ野球と独立リーグの関係をイメージすると分かりやすいだろう）。MLSプレーヤーになるた

た た 関 い

「ここでは自分の年齢を意識することはほとんどなかつたですね」

「日本にて、何もかもが用意されて
いますよね。でもこっちは、何でも
自分で解決しないといけないし、言
葉も違う。そういう環境に投げ込ま
れた時に、人間の生命力みたいなも
のが見えてくる。当然、サッカーに
も表われてきます。それがアメリカ
に来て、最も痛感したことですね」

(①年俸が日本に比べて格段に安い
(しかも6ヶ月契約が基本)

(②ボディコンタクトが激しいため、
ケガをするリスクが高い

(③国土が広大なため、アウェーでの
長距離移動を強いられる

(④U.S.LクラブからMLSクラブへ
の多番組登場はない、

ら、喜々として新大陸のピッチを駆け巡っていた——と。日本人選手最多年長、今年で35歳になる平野のコメントを、最後に紹介しておこう。

「こっちのチームに合流する時のフィーリングは、プロ1年目の時の緊張感に似ていましたね。でも、その後の一時間、プレーするなかで少しずつ

少取班

新大陸での日本人対決 今後さらに増える理由

4月25日に行なわれた、USL1部のバンクーバー・ホワイトキャップス対ポートランド・ティンバースの試合は、歴史的な一戦となつた。この試合では、バンクーバーに平野孝が、そしてポートランドには鈴木



平野 孝

(パンクーバー・ホワイトキャップス／MF)
74年7月15日生まれ、静岡県出身。名古屋や東京Vなど7クラブでプレー。J1通算352試合54得点。日本代表15試合4得点。経験豊富なレフティ。

(1)年俸が日本に比べて格段に安い
(2)ボディコンタクトが激しいため、アウェーでの
ケガをするリスクが高い
(3)国土が広大なため、長距離移動を強いられる
(4)JSLクラブからMLSクラブへの移籍が容易ではない
(5)と(4)については若干の補足が必要だろう。たとえばJSL一部では、南北はバンクーバーから南はカリブ海のペルトリコまでクラブが点在しているため、移動距離が尋常ではない。「バスでの20時間移動も経験した」(吉武)という過酷さだ。
また、JSLは独立リーグのため、そのま
いくらリーグで優勝しても、そのまま

ら、喜々として新大陸のピッチを駆け巡っていた——と。日本人選手年長、今年で35歳になる平野のコメントを、最後に紹介しておこう。

「こっちのチームに合流する時のフィーリングは、プロ1年目の時の緊張感に似ていましたね。でも、その後の1年間、プレーするなかでの発見は全然違いました。何しろ、初めての海外経験でしたから。今までのサッカー人生のなかでも、特に新しい発見の連続だったと思います。もちろん、もらっているお金は日本のはうが断然、良かったですよ。それでも、いい環境でサッカーをさせてもらっているということについては、本当に感謝しています」

④獲得選手の年齢に、強いこだわりがないこと

本国内で移籍先を探し、それからJSLへのトライアウトを受ける選手も少なくないのだが、当然、枠が埋まっている可能性も高くなる。前出の吉武は、12月上旬に戦力外を告げ

することは、ほとんどなかつたです
ね」と苦笑しながら語つていた。

ウティングが容易なアメリカでプレーしていれば、それだけでも大西洋を越えるチャンスは、日本より多いと言えよう。

のサッカー人生のなかでも、特に新しい発見の連続だったと思います。もちろん、もらっているお金は日本円のほうが断然、良かつたですよ。それでも、いい環境でサッカーをさせてもらっているということについては、本当に感謝しています」